

広島大学学術情報リポジトリ

Hiroshima University Institutional Repository

Title	韓国語の翻訳文体における日本語の重訳的誤謬 : 近・現代の受身表現を中心に
Author(s)	尹, 鎬淑
Citation	ニダバ , 27 : 47 - 56
Issue Date	1998-03-31
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00048028
Right	
Relation	



韓国語の翻訳文体における日本語の重訳的誤謬

— 近・現代の受身表現を中心に —

尹 鎬 淑

1. はじめに

日本語教育の目的には主に、日本文の読み書きの能力と翻訳能力、また国際的コミュニケーションを可能にするような語学力等が挙げられる。近年世界の国際化によりコミュニケーションのための語学の必要性が高まるにつれて、日本語教育関係の研究も会話や談話が中心になり、読み書き、特に翻訳に関する研究は相対的に少なくなっているようである。しかし、現代に至って国際的な情報交換のための翻訳の役割も著しく重大になったので、これに対する教育や研究も見逃してはならないにも関わらず、翻訳について日本語教育の立場から論じたものはごく限られている実状である。

これは韓国人の日本語教育の場合にも当てはまるが、日・韓両語の翻訳に関する研究は極めて少ないと言えるだろう。しかし、日本語から韓国語に翻訳された文章を調べてみると、語句や文体だけでなく、文法形式までも誤訳されている場合が多いので、これに対する言語学的考察が行われるべきであると思われる。尚、日本語の韓国語誤訳は、近代以降西欧文学を重訳するに当たって根深く定着し現代にまで機械的に踏襲されているので、韓国語における日本語の誤訳の本質を根本的に究明するためには、時代的にその変遷のあとを辿る通時的な検討が必要であろう。この誤訳の通時的検討は日・韓両語の差異点を探って、韓国人日本語学習者の日本語翻訳教育の方向付けにも役立つと思われる。

以上の点から、本稿では近代における日本語の重訳による韓国語の典型的な誤訳の類型を概観し、これが現代語にはどのように受け継がれているのかを比較考察する。尚、日・韓両語間に大きな差が見られるため訳出が困難で、誤訳の類型が最も多様な受身表現を中心に誤訳の様相について詳細に調べることにする。但し、受身表現の誤訳に関する正確な考察のためには、日・韓両語の固有受身表現との対照考察が必要であるが、これには拙稿(1995)を援用する。

2. 日本語の韓国語誤訳の意味と類型

2.1 日本語の韓国語訳における誤訳の歴史的 position

翻訳とは、『日本語教育辞典』(1995, 日本語教育学会編)によると、「ある国の言語・文章を同じ意味の他の国の言語・文章に置き換えること」とある。柴田(1970)等の指摘で

は、いい翻訳というのは原語が表現している内容を受容言語で自然に訳出したものであるが、翻訳者の多くは原語の形式だけを一語一訳的に対応させているため、誤訳を犯している場合が多い。

日・韓両語も、中国語の翻訳等、翻訳の歴史は長いが、近代以降語学教育上逐語訳が重視されたため、誤訳が多く、翻訳について論じたものも誤訳論になることが多い。特に韓国語の場合、日本語の重訳が殆どであるので⁽¹⁾、最初の誤訳が二重翻訳で一層ひどくなって「二重誤訳」になる場合が多い。更に、韓国語訳では日本語特有の表現形式や文法形式がそのままの形で韓国語に移し変えられているので、意味が正しく伝えられていない。周知の通り、日本語は近代以降西欧語の翻訳により古来なかった語彙や語法を新しく作ったり西欧式表現法を移入したりするが、韓国語の場合、日本語の重訳を通して先進西歐文化を摂取し、それによって文学的・語学的に近代化した。しかしながら、日本語化された新造語彙や語法だけでなく、日本語固有表現までそのまま受け入れたため、韓国語としては不自然な誤訳が多い。尚、近代に犯された重訳的誤訳は例1)のように、未だに続いているので、近代の日本語重訳を抜きにしては誤訳を語れない。(以下<>内は韓国語訳に対する日本語の原文である。但し、原文が見当たらないものについては筆者訳による。韓国語のローマ字転写はYale Romanization Systemによる)

1) 그 대답은 그를 혼란스럽게 한 듯했다. (『상실의시대』;55)/ku taytapun kulul honlansulepkey han tushayssta/<その答は彼を混乱させた。(『ノルウェイの森』;30)>

2.2 韓国語の翻訳文体における日本語の誤訳の種類

近代日本語の韓国語訳における誤訳は、非常に広範囲にわたっておかされているが、本章では近代の翻訳作品に現れる誤訳の種類を、その使用頻度が最も高く、代表的なものだけを取り上げ概観し、これらが現代の翻訳文体にはどのように用いられているかを比較検討する。まず、近代翻訳作品に用いられている典型的な誤訳としては、次のようなものが挙げられる。

2) 뻔루를 앞에 놓고 앉았는 거나하니 취한 장삿군같은사내와... (『罪와罰』;20)
/ppilwulul apheynohko ancassnun kenahani chwihan cangsaskwunkathunsanaywa.../

<「ビール」一本を前に置いた半酔の一人は小商人躰で。(『罪と罰』;145)>

3) a. 나는 著作業의 誘惑과 無價値한 事業에 對하야의 幕大한 金錢上의 報酬와 偉大한 賞讚의 誘惑을 經驗하였다.
(『나의 懺悔』;21)/nanun cecakepuyyuhokkwamwukachihansaepytayhayayumakdayhankumcensanguy
poswuwawitayhansangchanuyyuhokulyenghemhayessta/<私はすでに著作の誘惑と、つまらない自分の作物に対する莫大な金錢上の報酬や拍手喝采の誘惑にとらわれていた。(『懺悔』;23)>

b. 부모의 이르는 말을 듣지 아니한 버락이 나리나보다 하였고, (『로빈슨무인절도표류기』;31)
/pwumouy ilunun malul tutci anihan pyelaki nalinapota hayessko/<父のいうことを聞かなかった

ために天罰がてきめんにくだったと思った。(『ロビンソン・クルーソー』;17) >

- 4) …하마트면 나를 거꾸로 들어박을 번했으므로 나는 광노(狂怒)의극도에달하였다。(『검정고양이』: 21) / hamathumyen nalul kekkwulo thulepakul penhayssumulonanun kwangnonyukuktoeytalhayessta / <夫れが爲め…轉げ掛りしが劇しき怒り一時に出て(『黒猫』;132) >
- 5) 그것은 그가 그의兄의信念에서感化바든것도 아니고 쓰는 그自身이 엇더한決心이잇섯든것도아니고… (『나의懺悔』;4) / kukusun kuka kuuyhyenguysinnyemeysekamhwapatunkestoaniko ttonun kucasini esttehankyelsimiissestunkestoaniko / <それは、彼が兄の信念を知ってそれに共鳴したためではなく、また彼自身が自己の内部で何事かを解決したためでもなくて…(『懺悔』;8) >
- 6) 아들들에게서도 아버지와갓치 尊敬을받고, 그리고, 알베르트에게서는… (『절문베르테르의슬픔』; 201) / atultuleykeyseto apeiwakaschi conkyengulpasko kuliko alpeyluthueeykeysenun… / <子供たちからは父親のように慕われ、…そして今現れたアルベルト…(『若きヴェルターの悩み』;38) >
- 7) 적수공권이되면 벌서 인간사회에서 몽둥이로 매를맞는 정도가 아니라, 비로 쓸어내버림을당하고마 니까요。(『罪와罰』:25) / ceksukongkwenitoymyen pelse inkansahoyeyse mongtwungilo maylulmacnun cengtoka anila pilo ssulenaypelimultanghakomanikkyo / <乞食は社會から棒でたたき出されるト云ひたいが、棒より一層甚だしい帚で掃き出されツちまう。(『罪と罰』;147) >

まず、2)の例では、日本語の語彙がそのまま韓国語に移し替えられているが、このような語彙の誤訳は日本語の韓国語訳において最も頻出するものである。上述したように明治以降、日本は西欧語の翻訳過程で多くの訳語が作り出されるが、これらは韓国語訳にも数多く用いられている。更に、近代の翻訳作品には「황금침상(黄金の寢床)」「권척(卷尺)」「무든착하게되어(無頓着になって)」等、日本語の転移表現⁽²⁾も相当数見られる。しかし、これらの転移表現は現代になっては「国語純化運動」⁽³⁾の展開により少なくなっている。但し、「洋傘」「十分」「書齋」等、日本語の翻訳語彙であることが意識されず依然として現代の翻訳作品に用いられているものもある。

この他、日本語の翻訳語彙として顕著なものは「적(的)」というものである。『韓国語大辞典』(1995, 学習研究社)によると「日本語の『的』は、もと、『の』の意に当たる中国語の助詞。これにならい、明治初期の翻訳文で英語の-ticの音と意味に当てて用いたのに始まる。」とある。このように使われはじめた「的」は、近代韓国語の翻訳作品を始め近代韓国語の小説や新聞にも頻用されている。更に韓国語では「無意識的」「神経質的」等、日本語にないものまで使われ、現代においては「的」の使いすぎが問題になっている。これは韓国人学習者の日本語教育にも重要な問題をはらんでいる。つまり、「的」の誤訳は、韓国人日本語学習者の「的」の誤用までひきおこしている一因となる。

次に、語彙について、日本語の誤訳の例として韓国語の翻訳文体に多用されているものに主格助詞「의」がある。例文3)がその例であるが、3)aの場合、一文中に、「의」の誤訳が4回も見られる。しかし、正しくは「의」を全部省略して「나는 쓰고싶은衝動과, 價値없는作業에비해幕大하게받는報酬・그리고賞讚에대해誘惑을느꼈다(私は書きたくな

る衝動と、価値のない作業に対する莫大な報酬、そして賞賛に誘惑を感じた)」に置き換えられるべきである。

元々韓国語の助詞「의(の)」には日本語の「の」と違って、所有の意味しかなく、大体省略する場合が多い。ところが、韓国語の近代翻訳作品には日本語と同じく「의(の)」が省略されず、多様な意味で用いられている。その中でも、例3)bのように「主格」の意味で用いられている場合が多い。そのため、文章全体の構成がくずれてつじつまの合わない文になってしまう。これらは下例のように現代語の翻訳作品にも多数使用されているので、翻訳上注意を要するものである。

8) 그러나 샷포로에 있어서의 우리들의 사흘째와 나흘째도 헛되이 사라져 갔다. (『양을둘러싼모험』; 239) / kulena saspholoey isseseuy wulituluy sahlukcaywa nahulkcayto hestoyi salacye kassta / <くしかし札幌における我々の三日めと四日めも無為のうちに過ぎ去った。(『羊をめぐる冒険』; 30) >

第三に、日本語文を韓国語に訳す際に、留意すべきは、日本語文は名詞結合の傾向が強いのに対して韓国語は動詞中心の言語であるので名詞から動詞への品詞の転換が必要な場合が多いということである。例4)も、名詞の使用の著しい日本語表現を韓国語に訳すのに、韓国語の固有語でない漢語を羅列する機械的な翻訳を行ったため、読みづらい翻訳文体になっている。これも、自然な韓国語に訳そうとすれば下線部を「극도로 화가 났다 / kuktolo hwaka nassta / (極度に腹が立った)」のように動詞文で品詞を調整することが望ましい。これは次のように現代の翻訳作品にも多く見られる。

9) 그것은 어디로도 갈곳이 없는 투명함이었다 (『상실의시대』; 77) / kukesun etiloto kalkosi epnun thwumyenghamssta / <それはどこにも行き場のない透明さだった。(『ノルウェイの森』; 55) >

第四に、日本語における西欧語の翻訳の影響としてよく取り上げられるものに代名詞がある(江湖山1964等)が、近代韓国語の翻訳文体には例5)のように、人称代名詞の頻用、代名詞の重複使用、再帰代名詞の無理な使用、英語の非人称主語‘it’の翻訳語である「그것(それorこれ)」の不必要な使用等が目立つ。現代韓国語の翻訳作品にも数的に近代ほど多くはないが、これらの誤訳があいかわらず見られる。

第五の誤訳としては接続語の重複使用が挙げられる。元々接続語は近代以前にもある程度用いられたが、近代以降数量や種類が著しく増えている(拙稿, 1996)。時枝(1950, p.144)は、「西欧語の影響による近代日本語成立の最大のものは、論理性・客観性の導入で、この論理性・客観性文章の展開に重要な役割を果たしているのは接続語である。」と指摘しているが、韓国語の場合も、近代以降接続語の発達は、近代韓国語の成立に重要な位置を占めている。しかし、韓国語では、接続語の重複使用等、頻用が問題になっている。例6)の接続語の重複使用は古来韓国語にはなかったもので、日本語の誤訳により多数使用

されはじめたが、接続語の使いすぎは文章を繁雑にし、だらだらと長く続く感じがするため、韓国文としては直訳くさくなる。例6)でも後者の「そして」は訳出しないほうが自然で分かりやすい韓国語になる。それにも関わらずこの接続詞の重複使用の誤訳は、例10)のように現代語にも多数見られる。

10) 사내는 멀쩡하게 살아있지요. 그러나 그런데도 죽인 것입니다. (『덤불속』; 73) / sanaynun
melccenghake salaissciyo kulena kulenteyto cukin kesipnita / <男は立派に生きてある, しかし
それでも殺したのです。(『藪の中』; 166) >

最後に、例7)は受身表現の誤訳の例であるが、頻度が高くその類型が多様であるため、誤訳の中でも最大のものとして挙げられるものである。受身表現の誤訳については次章で詳細に調べることにする。

以上、近・現代の韓国語の翻訳文体に見られる日本語の誤訳について概観したのであるが、この他、日本語をそのまま盲目的に韓国語に移している誤訳には「에 있어서(において)」「왜냐하면~때문이다 / waynwahamyen~ttaymwunita / (なぜなら~からである)」「인것 같다 / inkeskatta / (のようだ)」「하지 않을 수 없다 / hacianhulsuepta / (せざるを得ない)」等、数多い。これらに関する考察は紙面の都合上省略する。

3. 受身表現の誤訳の類型

前章では、日本語の韓国語訳の際に誤訳されやすいものを中心に触れてきたが、ここでは前章の最後にあげた受身表現の誤訳を類型別に分析する。

さて、既述のように翻訳において大切なことは、もとの言語が表現している内容を受容言語により出来るだけ自然に移し変えることである。しかし、各言語にはそれぞれ独自の特質があって、翻訳の際に多くの調整を必要とする。受身表現も言語間に大きな差が見られるため、訳出にとっても難しい問題としてよく挙げられるものである。Eugene A. 他(沢登他訳, 1973, p.143)によれば、「受身表現が全くない言語と能動表現のほうが圧倒的に多く使われる言語間の翻訳は、受身表現を能動表現に変えたり、『擬似能動態』というべき形に変えなければならない」が、受身表現をそのまま移すと文体的に不自然になったり、意味が不明瞭になったりする。日・韓両語間の翻訳の場合も、受身表現と能動表現の問題が難物の対象になり、誤訳の中でも最も多様な様相を見せている。

本章では先ず両語の固有受身表現に関する相違点を近世を中心に調べ、韓国語の翻訳文体に現れている日本語文の誤訳について類型別に分析する。

3.1 両語の固有受身表現

近世日・韓両語の受身表現の使用頻度を調べてみると、日本語における受身文の数は頁当たり平均0.5文以上であるのに対して、韓国語の受身文の数は頁当たり平均0.1文を越えない(拙稿, 1996)。この点から韓国語の受身文の全体の割合は日本語に比べて極めて少な

かったことが分かる。また、受身表現の類型も日本語が直接受身表現，間接受身表現，有情の受身表現，非情の受身表現等，多様であるのに対して，韓国語の受身表現は間接受身表現は存せず，非情の受身表現も自動詞のないものに用いられている場合が殆どである。

11) 世に捨てられたるあまり者なり。<直接> (『浮世物語』，巻三)

12) 人さまにころをあらはに見らるるも<間接> (『好色一代男』巻一)

13) 又秋の頃しも，露霜などに染められて，<非情> (『露殿物語』，104)

14) 어사형벌노죽으니쇼저몸은경사로잡혀가니…<直接> (『九雲夢』;54) / esahyengpenocwukunisyoocyem omunkyengsalocaphyekani / <勅使刑罰で死んだら僕は捕まえられキョンサへ連れて行かれ…>

15) 이럼으로명망이조야에덥혀터라. <非情> (『意幽堂日記』; 16) / ilemulomyengmangicyoyaey tephvestela / <こうして名声が天下に広まった。>

この他，韓国語の場合，受身の上接動詞の数も日本語に比して非常に少なく，しかも「잡히다 / caphita / 捕まえられる」，「뭉치다 / muschita / 埋められる」，「노히다 / nohita / 放される」等，動詞によって偏りが見られる。従って，日本語の韓国語訳の場合，受身表現は特に注意を要する。尚，日本語の間接受身表現は他動詞だけでなく自動詞からも作られ迷惑の感情が含まれているが，これは韓国語にないカテゴリーなので，韓国語においてその理解は困難になり，翻訳にとっても難しい問題となっている。そのため，間接受身表現の場合，韓国語では能動表現で訳したあと，迷惑の感情は補足的な語句によって補うほかはない。

3.2 受身表現の誤訳の類型

以下，受身表現の誤訳を，四つの面から考察する。

(1) 非情の受身表現

日本語の受身表現においては主語としてどのようなものが許されるかというのがよく議論される。筆者の調査(拙稿，1994)によれば，日本語の受身表現は，古来は，有情物の受け手が迷惑の感情を持つ間接受身表現が多かったが，近代以降西欧語の翻訳により非情の受身表現が急増し，現代では受身表現全体の約7割を占めている。これは，非情の受身表現が近代以前には1割程度，近代には3割程度であったのに比べて相当な変化であると言える。それが韓国語訳にも引き継がれている。つまり，韓国語の場合も先述のように，本来受身表現が全然なかったわけではないが，抽象名詞主語の受身表現や「によって」類の受身表現等の西欧式非情の受身表現が近代日本語の翻訳を通してはじめて登場し，多用されている。しかし，韓国語では，動作主が想定される場合は元より能動表現で表すため，下例のように無理に受身表現にすると，韓国語としては生硬で，耳慣れない直訳調の表現になってしまう。

16) 그「크라테루프」는 妙하게 오려내어져서 빈 석냥匣우에 세워졌다. (『寫眞帖』;11) / ku kulathey

lophunun myohakey olyenayyecese pin seknyangkapwuey sey wecyesta / < その「クラテロフ」は妙に切り取られて空マッチ箱の上に立てられた >

17) 葬禮는 極히少數의 有意的사람사이에서 嚴肅히 舉行되었다. (『절은베르테르의슬픔』; 238)

/ canglyeynun kukhisoswuuy yuuyuisalamsaieyse emsukhi kehayngtoyveyta / < 葬儀は少数の知人の中で厳かに行われた (『若きヴェルターの悩み』; 102) >

18) 목수한사람이 배한척을 영조하는데, 낙성되는대로 일본을향하여 간다... (『로빈슨표류기』; 15)

/ mokswuhansalami payhanchekul yengcohanuntey naksengtoynuntaylo ilponulhyanghaye kanta / < 一人の大工が船を一艘作っているが, 作られ次第日本へ向かって行く (『ロビンソン・クルーソー』) >

さて、非情の受身表現の誤訳は現代になって更に顕著になっているが、例として次のようなものがある。

19) 가게의 선반에는... 과자며 빵 그리고 아이스캐디가 들어져 있었으며 (『살며생각하며』; 79)

/ akeyuy senpaneynun... kwacamyē ppang kuliko aisukhayntika tulvecyeyissessumve / < 店の棚には... 菓子とパンそしてアイスクンデーが仕入れられている >

(2) 「～불리다 / ～pwullita / ～と言われる, ～と呼ばれる」類の受身表現

次に上に述べた非情の受身表現のほか、日本語の韓国語訳の中で、両語間の発想の違いのため、原語のまま直訳すると不自然になってしまう受身表現がある。つまり、古来日本語には、類型的な言い回しが多く、「～と言われる」「～と呼ばれる」という言い回しの受身表現も、例20)のように、日本語の古今を通じて多数使われているが、韓国語の古典には全く見られず、その代わりとして例21)の能動表現が使われた。従って、日本語の「～と言われる」や「～と呼ばれる」は韓国語で誤りなく伝達するには能動表現に変えなければならない。

20) その中になほいひけるは色好といはるるかぎり五人思ひやむ時なく夜屋来けり (『竹取物語, 五人の貴人とその第一の求婚者右作の皇子』)

21) ...도적의 이름이 다 홍길동이라 하였고 (『홍길동』 『홍길동전』) / tocekuyilumitahongkiltongila hayessko / < 盜賊の名前はみんな「洪吉童」と言い, >

ところが、近代韓国の翻訳作品には、例22)のように日本語の「～と言われる(or呼ばれる)」を文字通りに移し変えたものが見られる。これは伝統的な韓国語とは異質な語法であるにもかかわらず現代語にも依然として相当数使用されている(例23))ので、韓国語としては生硬な語感の訳になる。しかも現代の翻訳作品には「～부르다 / ～pwuluta / ～呼ぶ」の二重受身表現である「～불리어지다 / ～pwulliecita / ～呼ばれる」まで使用され、受身表現の頻用が非常に問題になっている。

22) N부인이란, 상질리제 - 의여왕이라고 블리우는 여자로서 언제나 다 홍색이나 남색옷을 입고, (『춘희』;17) / Npwuinilan syangceylliceuyyewangilako pulliwununyecalose enceyna ta hongsaykina namsaykosulipko / <極楽街の花と謡はれてゐるN夫人で, 此婦は平常大抵薔薇色か藍色の着物を着て, (『椿姫』;276) >

23) 나쓰에의 부친인 쓰가와 교수는 내과의 귀신이라고 블리는, 게이조와 다까기의 은사였다. (『빙점』;28) / nassueyuy puchinin ssukawa kyosunun naykwaury kwisinilako pullinun keyicowa takkakiuy unsayessta / <夏枝の父津川教授は内科の神様といわれ, 啓造や高木の学生時代の恩師であった. (『氷点』;18) >

(3) 自動詞の受身表現

3.1의 固有受身表現のところでも述べたように, 日本語の受身表現は様々な特徴を持っているが, その中でも特に目立つのは, 自動詞にも受身表現があるということである。この自動詞の受身表現は迷惑の意味を含むことから迷惑の受身表現とも言われるが, 日本語だけの独特な受身表現であるため, 韓国語では能動表現で表し, 迷惑を受けた感情は補足的な語句によってあらわすほかはない。しかしながら, 近代韓国語の翻訳作品には次のように, 自動詞の受身表現の誤訳が相当数見られる。

24) 구름은 定處업시 블리는 바람에 휩쓸리어서 숨어버리고... (『密愛』;125) / kwulumun cengcheepsi pwullinun palamey hwipssulliese sumepeliko / <雲は狂ひ廻はる風に吹き拂はれて形を潛め, ... > (『あひびき』;82)

25) 그러케 될줄을 생각지 못하였다가 졸디에 이작별을당하게되니 (『헨으리마린』;40) / kulekh toyrcwulul sayngkakci moshayestaka coltiey icakpyelultanghakeytoyni / <そうならうとは考えも付かぬ間にいきなり別れられると>

上の例24), 25)も正確には「定處업시 부는 바람때문에 / cengcheepsi pwunun palam ttaymwuney / 容赦なく吹き荒ぶ風のため」「헤어지자고하는 바람에 / heyecicakohanun palamey / 別れようと云ったので」とでも訳すところである。但し, これらの自動詞の受身表現は現代韓国語の翻訳作品には殆ど使われず, 今回の文献の調査でも一例も採集できなかった。

(4) 二重受身表現

日本語の韓国語訳における受身表現の誤訳のなかで, 特に二重受身表現の誤りは最も頻度が高い。

一般に韓国語の受身形には「被動接尾辞이(i) / 히(hi) / 리(li) / 기(ki)」「被動助動詞지다(cita)」「하다(hata)動詞の被動詞되다(toyta)」があるが, 近代翻訳作品には「被動接尾辞」や「被動詞」に, 「被動助動詞」が重なり二重受身表現で使われている場

合が多い(例26), 27)参照)。これは28)のように, 現代の作品にも同じように繰り返されている。

- 26) 개구리는 도망가려했으나 발이 묶여졌는지라…소리개의 요기거리가 되었다합니다。/kaykwulinun tomangkalyehayssuna pali mwukkyecyessnuncila/ (「쥐와개구리」『이솝이야기』) <結びつけられていた蛙と一緒に随いて行って…鳶の餌食になりました。(「鼠と蛙」『イソップ寓話集』)>
- 27) 충충다리쪽으로 활짝 열려져있는 안주인네부엌…(『罪와罰』;6) /chungchungtaliccokulo hwalccak yellyecyeissnun ancuinneypuek/ <臺所が常々戸の開いたまま階子に對て居る(『罪と罰』;141)>
- 28) 풀이나 댓잎 낙엽이 넓게 짓발혀져 있는 것으로 보아 그 사내는 살해되기 전에 상당히 저항을 한 것이 틀림없습니다。(『덤불속』;69) /phwulina taysiph nakyepi nelpkey cispalbhycyve issnun kesulo poa ku sanaynun salhaytoyki ceney sangtanghi cehangul han kesi thullimebsslpnita/ <草や竹の落葉は, 一面に踏み荒らされて居りましたから, きつとあの男は殺される前に, 餘程手痛い働きでも致したに違ひございません。(『藪の中』;166)>

これらは, 日本語の受身表現を意識したあまり使われだした表現だと思われるが, 元々明確で直接的に表現する韓国語の表現法としては不自然に感じられ, 非文法的である。しかも, 例27)のように, 日本語の原文には自動詞で表されているものまで二重受身表現で訳されているので, 語学的に問題の多い訳になっている。

4. おわりに

以上, 日本文を韓国語に訳す際に犯される誤訳について概観し, 誤訳のなかでも最大のものと言われる受身表現の誤訳を類型別に考察した。その結果, 主格助詞「の」, 名詞形, 受身表現等は, 日本語にはかかせないものであるが韓国語には使われないだけに, 翻訳に際して調整を求められるにもかかわらず, そのまま移し変えられているため, 意味の伝達がさまたげられ, 韓国語としては生硬で直訳調の感じがする場合が多いことが分かった。

更に, 韓国語の翻訳文体に見られる誤訳は, 近代日本語の重訳から始まって現代にも受け継がれているので, 日本語の韓国語訳の際にかなりの注意を要するが, それに対する問題意識が全く存しない実状である。従って, 翻訳に関する様々な問題を本質的に分析, 説明して, 日・韓両語の翻訳教育に方向づけられることが望ましい。

このほか, 日・韓両語の対照研究にも資料として翻訳作品が用いられる場合が多いが, 以上の調査でも分かるように翻訳の作品には誤訳が多く, 必ずしも純粋な韓国語が使用されているとは言えないので, 正確な考察方法としては危険である。従って, 対照研究の際に資料選択面での留意が必要であるが, これに関する考察は今後の課題としたい。

<注>

(1)本調査の資料によると, 序文に日本語の重訳であることを明示した作品が多く, 明示されていない作品は

日本語の表現が多数使用されている点から日本語の重訳であることが判断できる。

(2)熊谷(1991, p.215)は、日本語原語そのままを韓国語表記したものを転移使用と命名し、その実態に関する実証的な研究を行っている。

(3)「韓国語を正しく綺麗に使おうとすること(『ハングル大辞典』1994, 語文閣)」で、1945年日本からの解放以降、国民の言語生活や一般向けの言葉を中心として発音、語彙、文法、表記法等の醇化を目指して発足した運動。

<主要参考文献>

- 江湖山恒明(1964)「欧文脈」『現代語の成立』明治書院
- 木村 毅(1965)「日本翻譯史概観」『明治翻譯文学集』筑摩書房
- 柴田武他(1970)『誤訳一ほんやく文化論』三省堂
- 時枝誠記(1950)『日本文法口語編』岩波書店
- 横井忠夫(1979)『誤訳悪訳の病理』現代ジャーナリズム出版会
- 松村達雄(1981)『翻訳の論理—英語から日本語へ—』玉川大学出版部
- Eugene A. Nida他著沢登春仁他訳(1983)『翻訳—理論と実際—』研究社
- 熊谷明泰(1991)「解放前朝鮮語に対する日本語の干渉」『日本文化研究』6
- 尹 鎬淑(1994)「近代の非情の受身について—韓国語との比較考察」『教育学研究紀要』40 中国四国教育学会
- _____ (1995)「近世における受身表現の特徴—日・韓両言語の対照的考察」『広島大学教育研究紀要』45
広島大学教育学部
- _____ (1996)「日・韓両言語の翻訳文体の考察—『あひびき』と『密会』の比較を通じて」『教育学研究紀要』42 中国四国教育学会
- 김 정우(1994)『번역문체의역사적연구』국립국어연구원
- 이 오덕(1990)「우리소설에나타난남의나라말과말법」『국어생활』23

<用例文献>

- 長田秋濤譯他(1965)『明治翻譯文学集』筑摩書房
- 山本光雄他(1942)『岩波文庫』岩波書店
- 芥川龍之介(1953)「藪の中」『現代日本文学全集』筑摩書房
- 三浦綾子(1982)『水点』角川文庫
- 村上春樹(1987)『ノルウェイの森』講談社
- _____ (1982)『羊をめぐる冒険』講談社
- 廉尙鑿譯他(1924)『泰西名作短篇集』朝鮮圖書株式會社藏版
- 李鍾駿譯(1925)『世界文學傑作集』漢城圖書株式會社
- 박은주譯(1994)『양을둘러싼모험』한양출판
- 유유정譯(1996)『상실의시대』문학사상사
- 진웅기譯(1994)『살며생각하며』범우사
- 최현譯(1993)『빙점』범우사